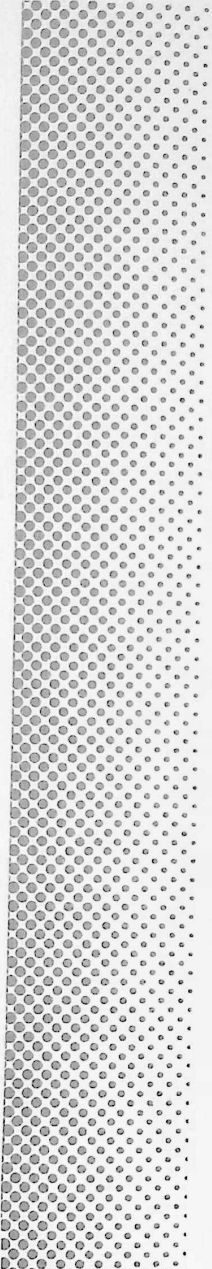




シシガ。ホー。ル。戦記

荒井三男

図書出版社



マレー進攻開始

動きたした第二十五軍
開戦

第十八師団主力の虎門出港

シンゴラ上陸

マレー半島縦断

ジョホール水道渡河

シンガポール攻略命令

渡河準備

深夜の渡河作業

敵前上陸

牟田口師団長、猪野参謀の負傷

テナガ、ブキテマ戦

テナガ飛行場へ

飛行場占領

不可解な命令変更

……七

……一四

……二〇

……三三

……三三

……三

……三〇

……四四

……四四

……六〇

……六〇

……六六

……六六

……六六

……六四

一三〇高地の不期遭遇戦

大なる錯誤

あいつぐ失態

西方要塞に向かう

第五師団長の敵情判断

近衛師団の苦闘

投降勧告文投下

西方要塞攻略

白昼の砲撃

二〇〇高地の死闘

西方要塞にせまる

シンガポール島南岸に到達

海岸高地攻略

シンガポール陥落

「敵降伏せり。前進待て」

はやる木庭連隊

……一〇三

……一〇八

……一三六

……一三六

……一三三

……一三三

……一四三

……一四三

……一四九

……一四九

……一四六

……一四〇

……一四七

……一四七

……一八七

……一九四

第五師団の停滯
軍命令にふりまわされた近衛師団
山下軍司令官の苦惱
英軍降伏

転進

……二六
……二〇六
……二三
……二六

スマトラ先遣隊
慰霊祭と敵性華僑の掃滅
新たな戦場へ

……二五
……二〇
……二四〇

付録資料

マレー作戦参加部隊一覧
関係部隊主要人名一覧
あとがき

……二四
……二五〇

シンガポール戦記

あとがき

私はもともと、ものごとにあまり積極的な方ではなく、どこか軍隊生活にはなじめないものを感じていた。したがって、日本が戦争に負けて軍隊が解散してからは、旧軍関係の集まりには一切関わらず、ただ元第百十四連隊第二中隊の戦友会に出席する程度であった。それが、会社を定年になっていくら過去をふりかえる余裕ができたためか、最近、といっても五、六年も前からであるが、区の新しい図書館が近所に建てられたこともあって、二週間に一冊程度の割合で、なじみの深い戦記を読むようになった。

そんなとき、昭和五十五年二月に開かれた元第二中隊の戦友会で中隊史をつくることになり、第百十四連隊のシンガポール攻略戦の概要について書くよう依頼されたのである。昭和十七年二月、太平洋戦争開戦時における陸軍の最重要作戦であったシンガポール攻略戦は、期間は一週間と短かったものの、毎日が戦いの連続で、その真った中にいた中隊は、他の部隊の動きはもちろん、戦局がどうなっていたのか、まったく何もわからないありさまであった。それに中隊の幹部はほとんど戦死したか、または負傷して途中で後送されたために、連隊全体の状況を把握している者がいない。荒井は連隊本部にいたのだから、連隊のことならわかるだろう、というのであった。

たまたま、私は何回か焼いてしまおうと思いつきながら、つい焼かずに残っていた日記があったので、おおよそのことは書けるのではないかと思って引き受けた。ところがわずか七日間のことではあったが、四十年たった今では、同じ連隊本部のことでも、人の名前も思い出せないほど記憶が薄れてしまっているのである。

このため、今までもシンガポール戦関係の本は二、三読んでおり、第十八師団、特に第百十四連隊関係の記載がないことはわかっていたのだが、もしやと思い図書館に行ってみた。幸運なことに、そこで中国新聞社の編集委員御田重宝氏の『マレー戦』上下二巻を見つかることができた。御田氏はたびたび第五師団の戦闘詳報を引用されていた。私はさっそく、第十八師団の戦闘詳報について御田氏に問い合わせしてみた。おり返しいただいた返事は、「第五師団の戦闘詳報はその写しが防衛庁の戦史室に保管されているが、第十八師団関係のものは残っていない。そのかわり、師団参謀であった橋本洋中佐が戦後『第十八師団のマレー作戦記録』を作成して戦史室に寄贈しているから、それを見ればおおよそのことはわかるのではないか」とのことであった。

その直後、私は防衛庁防衛研究所戦史室が編さんした公刊戦史『マレー進攻作戦』を入手した。ところが驚いたことに、この戦史は第十八師団関係、特に第百十四連隊にかぎって、ジョホール水道渡河から上陸戦闘、テナガ飛行場にいたるまでの状況、ブキテマの周辺、一三〇高地の占領、海岸高地の攻略などの戦況にはまったく触れておらず、たまたに記されていても、事実とは違っていた。おそらくその原因は、戦史の資料となった橋本参謀の記録に、第百十四連隊関係の記述があまりなかったためであろうが、いずれにせよ期待したような事実を得ることはできなかった。

ところで、公刊戦史によると、シンガポール戦での第十八師団の損害は、相対的に第五師団の損害の二倍になっていた。また、英軍が降伏したのは当然、第五師団がシンガポールに中央から突入したためであると思っていたが、意外にも依然、南水源池南側地域に停滞したままであった。前半、せっかく有

利に展開して、いま一押しすれば英軍は壊滅していたにちがいないシンガポール戦が、にわかには苦戦に転じた原因は、敵の戦力を過小評価していた山下軍司令官以下の軍首脳が下した軍命令にあったこともわかった。

当時、華々しく喧伝されたシンガポール戦の「大勝利」は、太平洋戦争の緒戦という時の勢いに乗せられた虚名であり、実はノモンハン、ガダルカナル、あるいはインパールなど同じように、軍首脳の敵軍軽視の思想から必要以上の損害を出した戦いだったのである。たまたま、軍の展開命令が出された前後にブキテマ付近にいた私たち第百十四連隊は、その軍命令のあたりを受けてふりまわされ、多くの犠牲者を出すことになった。もとよりそうした記録は公刊戦史にはないが、この軍命令発令前後のブキテマ付近の状況こそが、シンガポール戦の最大のヤマであった。

以上のことがわかってみると、第二中隊の中隊史の資料としてはどうかと思うが、虚名ではない真実の『シンガポール戦記』を書きのこしておくことが、当時、歩兵第百十四連隊の連隊本部に籍をおいていたもののつとめではないかと思った。

さいわい、当時の中、小隊長をはじめ、将校、下士官、兵が多数健在であり、回想や資料を提供していただくことができた。また出版にあたっては、図書出版社の山下三郎社長ならびに編集部の方々にも多大のお力添えをいただいた。厚くお礼申し上げる次第である。

回想、資料提供者（敬称略）

河村甫、辻正臣、松林学、河上勘助、田中吉雄、市村肇、木本大二、水間金輔、大西清、白石光雄、水口正治、井神俊一、高津一治、平井郁郎、富田稔、大神文和、友富学定、政岡憲雄、田口（小林）幸男。

参考文献

- 防衛庁戦史室編『戦史叢書マレー進攻作戦』（朝雲新聞社）
 橋本洋編『第十八師団のマレー作戦記録』（防衛庁戦史室保管）
 児島襄著『山下奉文／激戦の跡をゆく』（文藝春秋）
 御田重宝著『マレー戦』（徳間書店）
 越智春海著『マレー戦記』（図書出版社）
 保科善四郎著『大東亜戦争秘史』（原書房）
 森山康平、栗崎ゆたか共著『ビルマ・インドへの道』（新人物往来社）
 大谷敬二郎著『陸軍80年』（図書出版社）
 児島襄著『日中戦争』（週刊文春連載）
 土金富之助著『シンガポールへの道』（創芸社）
 伊藤正徳著『帝国陸軍の最後』（角川文庫）

一九八三年十一月

荒井三男

著者紹介：荒井三男（あらい・みつお）
1912年福岡県庄。県立小倉中学校卒。1937
年9月応召。華中、華南、マレー、ビルマ
を転戦し1942年9月内地帰還。1944年より
華北で醫備。作戦に従事。終戦時陸軍准尉
現住所：〒802 北九州市小倉南区田石園
3-10-15 電話 093 (931) 3272

検 印 省 略

シンガポール戦記 定価 1500 円

1984年1月10日 初版発行

著 者 荒 井 三 男
発 行 者 山 下 三 郎
発 行 所 株 式 会 社 図 書 出 版 社

〒 No. 162 東京都新宿区白銀町16番地
電話 03 (260) 0011 振替 東京2-107172

印刷・アール企画印刷/製本・小高製本
© M. Arai 1984 Printed in Japan

0095-849001-5306